

脳卒中後の心房細動患者に対するワルファリンに長期的有益性が確認

ワルファリンは、心房細動患者の血栓塞栓症予防のために使用されることが推奨されているが、その根拠は、選択された患者集団での臨床試験に基づくものであり、試験設定外の心房細動については、ワルファリンの有益性は確認されていない。そこで本研究では、心房細動患者の虚血性脳卒中後のワルファリン治療と長期的転帰の関連について、地域医療ベースで観察研究を実施し検討した。

米国の1,487の病院から、虚血性脳卒中中で入院したワルファリン未治療の心房細動患者12,552例が対象となった。退院時にワルファリンを処方された患者と、あらゆる経口抗凝固薬が未処方であった患者を比較し、長期的転帰について評価した。対象者のうちの88%が退院時にワルファリンを処方されていた（ワルファリン治療群）。経口抗凝固薬未治療患者と比較して、ワルファリン治療群は退院後2年間の自宅で過ごした期間が有意に長かった（補正後の差47.6日）。また、ワルファリン治療群は、主要有害心イベントの発生リスク、全死因死亡、虚血性脳卒中中の再発についても有意に低下した（補正後ハザード比はそれぞれ0.87、0.72、0.63）。これらの差は、年齢、性別、脳卒中の重症度、冠動脈疾患と脳卒中の既往歴の別でみたサブグループにおいても一貫して認められた。

今回の結果から、虚血性脳卒中後の心房細動患者に対するワルファリン投与は、長期的転帰や自宅生活の期間を改善することが示された。

出典：British Medical Journal(Clinical research ed.). 2015;351: h3786